

私のプロジェクトX

佐々木 敏 雄

和をもって尊しとなす

1 緒言

90歳を越えた今日、私の生き様はどうであったろうかと強く考えるようになりました。大学同期生で卒業後の経歴をまとめ、回覧しあった時の資料を基礎に、その前後の私の歩みを時系列にまとめてみようと思いましたが、思うようになかなかまとまらず、日時のみ経過し、筆は遅々として進まず、諦めかけもしましたが、私の今日あるを支えてくれた大勢の人たちの励ましの声も何かしら感じながら一応書きなぐってみました。私の人格の構成に関しては、今次大戦と、やはり大きく作用し育成してくれたコンサルタント時代にその礎があると思います。それもこれも、多くの人たちの惜しみない、そして心強い協力のお陰と、今になってほんとうに心から感謝している次第です。

私という人間の一端でも知っていただければ幸いです。

2 北海道大学時代

北大では無条件に理学部、そして地質鉱物学科を選びました。同期で地鉱科に入った1年目の学生は13名でしたが、間もなく一人が徴兵され12名となりました。1年目の夏休み、北海道工業試験場の千島の地質調査を教室で全面支援することが決まっていたのですが、我々も先生方の助手で、賃金をもらいながら勉強の機会を得ました。私は石川助教授付として北千島の占守(シュムシュ)島を担当しました。当時の日本の最北端であった占守島は何となく風雲急のようで、各島々に作業員風の兵隊が大勢いたのが気にかかっていました。私たちは國端(コクタン)崎で石川先生と一緒に万歳を三唱したのを今でもはっきりと覚えています。また、食事は何時も鮭が多く閉口したことも鮮明に記憶しています。

すでに北千島は準戦時体制で、工員と思っていた

人たちは皆軍人だったことが分かったのはしばらく経ってからでした。

12月8日、日米開戦の報を聞き、北千島のことなどが頭をよぎりました。教室の授業は平常でしたが、指導助手は、今日恐らく自分のところに召集令状がくるに違いないといわれ、何か身の引き締まる思いがしたのを記憶しています。

2年日の修論の実習は赤平周辺が担当でした。石炭の増産運動のさなかで、指導にこられた佐々先生のお供をして炭鉱のクラブでご馳走になり、こんな時代でもある所にはあるものだと感じたのを覚えています。その後、私は鉱床を専攻、指導の渡辺助教授から古平の稲倉石鉱山の鉱床をとということで、まず周辺を調査し、次いで坑内の調査に入りましたが、途中で坑内に水が噴出し、稲倉石は中止することにしました。先生は新たに島根県の石見鉱山付近の鉱床の調査に変更され、さっそく準備して出発、日本鉱業の現地職員の協力をいただき、2ヶ月ほど滞在して帰札。このとき、就職について相談があり、一切先生にお任せしますと申し上げました。先生より日本鉱業を推薦され上京、人事部長の面接を受けて帰札後間もなく日本鉱業から正式に入社の案内がきました。その間、海軍の見習尉官に応募し、口頭試問があり無事終了しました。海軍の技術見習尉官は従来商工省の地質調査所に入った人が合格する傾向にあるとのことでしたから、私は駄目だと思っていたところ、合格の電報が入り、翌日学校で報告すると民間会社に就職して合格したのは初めてだと不思議がられました。1943年(昭和18年)8月、卒論の提出も終わり、海軍への入隊も決まり、学友もそれぞれ就職が決定し、お別れのクラス会で互いの前途に祝福あれと万歳を三唱して三々五々散会しました。

3 海軍時代

戦争のため半年短縮の繰り上げ卒業となった我々



写真－１ 北海道大学理学部 教官と同期の学生とともに(1941年) 前列右端が私

は 1943 年(昭和 18 年)9 月 25 日が卒業式でした。辛か不幸か、その日は私の就職先である日本鉱業の入社日であり、また海軍技術見習尉官としての入隊日でもありました。とにかく海軍への入隊を最優先として、母、兄とともに上京、上野の近くの旅館に米満女史が私の卒業証書を持参して来訪され、卒業できたことで安心して海軍に入隊しました。

以前は大学出身者はすぐ中尉に任官したそうですが、士官としての「躰け教育」の必要性から、我々見習士官は青島(チンタオ)の山東大学で猛烈な訓練を受けました。

1944 年(昭和 19 年)1 月、私たちに第 5 海軍燃料廠への赴任命令が発令され、残留訓練中の同期の人たちの帽振れの礼に見送られ、大連まで船で、それより奉天経由で平壤(ピョンヤン)の第 5 海軍燃料廠に着任。私は総務課勤務となり、同年 3 月海軍技術中尉に任官しました。

総務課勤務中の 5 月中旬、突然の高熱のため入院、猩紅(デング)熱と診断されました。これは法定伝染病のため別の病棟に移され、海軍の公報にまで記載されました。しかしどうも軍医の誤診のような気がしてなりません。8 月、我々に待望の転出が発令されました。無礼講での盛大な壮行会があり、あまり飲めない私もどうやって宿舎に戻ったか記憶

が定かでない一夜でした。

赴任前に札幌で墓参りをし、軍刀の調達くらいの時間はあると思っていましたが、そんな余裕などまったくなく、九州の若松港に着くや否や、待機中の 10 隻の船団は急遽出航しました。我々の乗船した淡路丸には陸軍の兵隊 800 名と、大量の火薬が積載されていました。我々士官は一等船室でしたが、陸軍二等兵が一人、我々と同じ一等船室に在室していました。船員に聞くと、あの方は元逋信院総裁の松前博士とのことでした。技術屋の大先輩ということで一夜夕食を共にして、階級を別にしているいろいろ懇談しました。東条さんに睨まれ、富永陸軍次官が解除の印を押さないで召集されたとのこと、さらに今後の戦況や国としての技術屋の利用の方法など熱弁をお聞きしました。終戦後復員された松前博士は社会党の国会議員として活躍されたり、また東海大学の総長として長年教育に尽力されておられました。松前博士の随筆集「二等兵の手記」の中にどやどやと若い海軍の技術士官が乗船してきたとのくだりがありますが、この士官とは我々のことです。

忘れもしない 1944 年(昭和 19 年)8 月 24 日の未明、台湾の基隆(キールン)沖で轟沈(火薬が爆発し 30 秒で沈没)と撃沈が、我々の淡路丸の前後でありましたが、我が船長は急遽停船して魚雷を避

けたとのことでした。我々は急遽基隆に入港、さらに台北の海軍武官府で協議し、急ぎ赴任するため飛行機を利用すると決定しました。数日後、我々は「敵機の見張りにご協力下さい」との張り紙のある民間輸送機で赴任することになりました。台北－高雄－マニラ－ダバオ－メナド－マカッサル(ここでデング熱のため二週間入院)と飛行機で、ここより第101海軍燃料廠のあるボルネオのサマリングまでは船で、やっと本部に到着。私は本来ニューギニア要員でしたが、急遽ボルネオ・タラカン島支廠勤務を命ぜられました。魚雷を避けながら海岸沿いに機帆船でタラカン島に到着。地質課勤務の辞令をいただきました。

タラカン島は旧蘭領の石油地域で、オランダ語の各種文献があり、これを現地の人に英語に翻訳してもらい、地質調査にたいへん役立ちました。時々敵機の来襲があつて防空壕に退避したりもしましたが、防空壕は先着順で、現地の人とも我々も区別があ

りませんでした。オランダ統治時代は白人と現地の人との避難防空壕が分けられていたので、現地の人にはたいへん評判が良かったです。このタラカンの石油基地には1万トン級タンク2基、5,000トン級数基、1,000トン級10数基あり、さらに製油施設関係、橋梁施設などが完備しておりました。日本からの石油引取船は途中で撃沈されてしまうため、各タンクとも満タンになっていました。

次第に偵察機の飛来頻度が多くなり、1945年(昭和20年)1月10日、ボーイングB17を主力に100余機による大空襲があり、石油施設、軍事施設及び宿舎などが攻撃を受け、島全体が火の海と化しました。幸い私たちは防空壕で無事でした。

この大空襲でタラカン島の石油基地機能は完全に麻痺し、さらに海上も封鎖状態となり、食料自給、特に現地の人々の食料補給が容易でなくなってきました。そこで、ボルネオ本島ブロンガン地区に食料の自給自足のため現地の人を移住させ、農場を拓き、



図一 日本から赴任地ボルネオ・タラカン島へのルート(1944年)

トウモロコシ、諸類を栽培するなど、自給自足の体制が計画されました。担当は地質課と決まり、責任者は牛島課長(戦後は東北大学教授)、隊長は技術大尉の私、それに農業担当の5名の邦人が、ボルネオ本島のカヤン河の河口より遡航すること約半日の行程のタンジョンセロル地点に本拠地を置き、タラカンより引率した現地作業員数百人が開墾作業に従事しました。この開拓、開墾作業もようやく軌道に乗り、ホッとしていた同年4月29日の天長節の日、夜明けとともに、タラカン本島は砲爆撃を受け、さらに軍備装備の少ない2,000有余の日本人に対し、1万数千人の豪州軍が上陸攻撃を開始した由をタラカンよりの伝令が伝えてくれました。我々も日本人として、また軍人として戦況不利なタラカンへの逆上陸を協議していたところ、5月7日の夜、上陸用舟艇に乗った伝令が支廠長の命令を伝達にきてくれました。「陸路サマリンドに転進し、本廠の命に従え」とのことでした。

タラカン島の戦闘状況をまったく知らなかった我々は、いろいろ協議して作業にきていたダイヤ族の協力を得て、彼らの丸木舟2艘を借り、塩と布地を持って出発することにしました。

ここ数日の我々の行動で現地の人の一部は我々の負け戦さを感じていたようでした。幹部級の数名が我々と生死を共にすると同行を申し出て、我々を感激させましたが、この農場の運営、管理をするように説得してようやく納得してもらいました。

5月10日、我々は不正確な地図とダイヤ族の見聞感を頼りに2艘の丸木舟でカヤン河を遡り、船を担いで山越えをしてマハカム河の上流より今度は河を下ってサマリンドへ到着しようという、無謀に近い出発でした。食料は10日分のみであとは塩1キロで鶏10羽と卵20個くらいと物々交換ができ、また陸稲の米もダイヤ族の集落で調達することができました。たびたび機銃掃射を受けながら、戦利品の頭蓋骨を宿舍の前に陳列しているダイヤ族の集落に宿泊しつつ上流へと進んで行きました。海軍少尉の駐留する集落で休養していた時空襲があり、防空壕を出た瞬間、左膝貫通傷を受け、蝋燭の灯りを頼りに防空壕内でヨーチンを塗り、筋肉を縫い合わせて治療は終了。約二週間後、再び先発した丸木舟を追い、ダイヤ族の言葉を信じながらジャングルの中を丸木舟を抱えながら右往左往。やがてマハカム河の支流らしき河流を発見、ここを下ってマハカム河の本流に出ることができました。あとは下る一方で、炭坑の街口アクールに到達しました。

このマハカム河下りも決して楽な行程ではなく、急流あり、滝あり、さらに鱷に出会うなど相当危険を伴いましたが、無事第5海軍燃料廠時代の戦友に、この口アクールで会うことができホッと安心しました。

タンジョンセロルを出発してから1ヶ月余、走破距離1,000キロ近く、負傷した足をかばいながらの行程でした。戦友と語り合って一泊、翌日第



写真-2 タラカン島サルタン家訪問(一夫多妻)後列中央が私

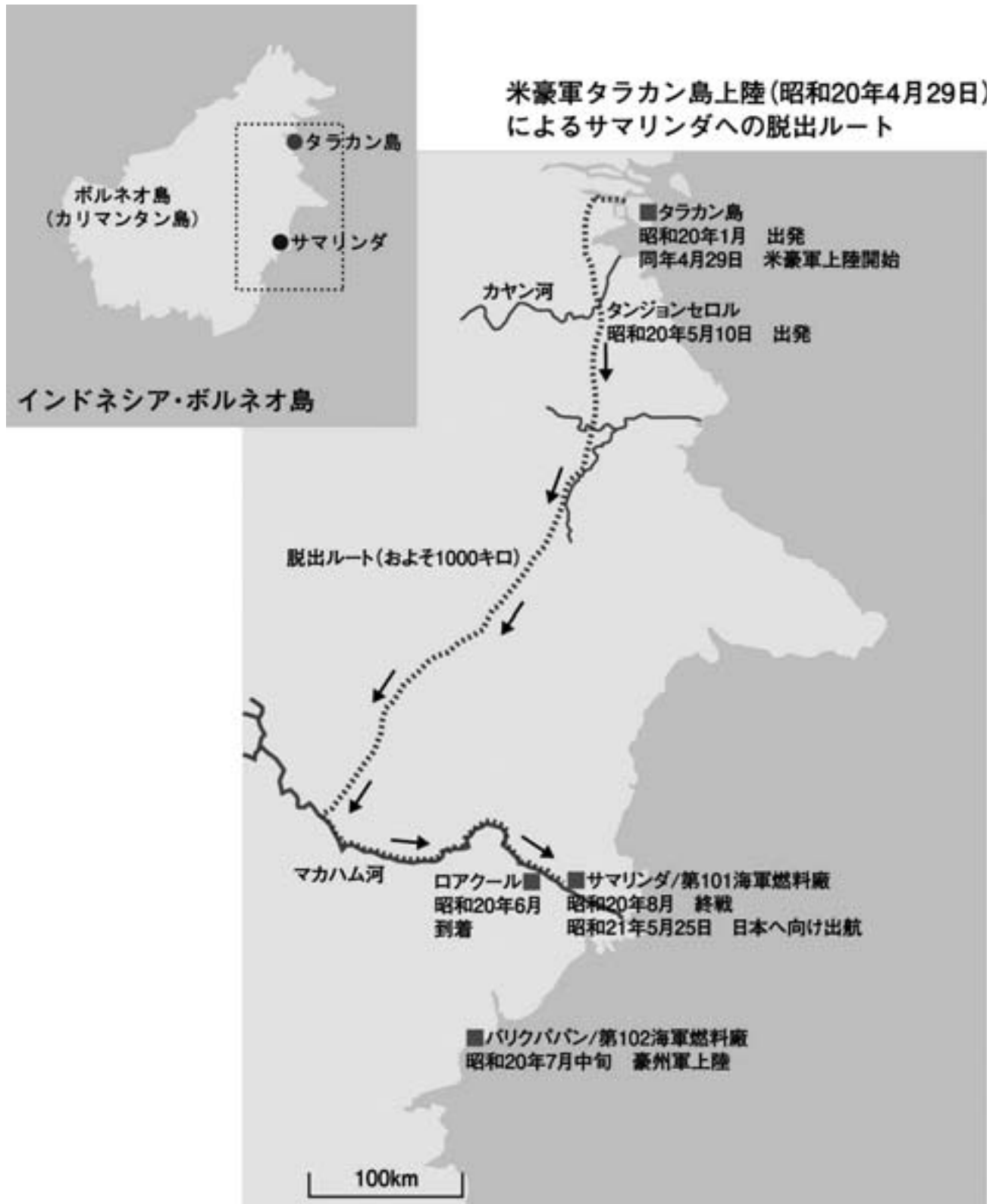


図-2 サマリンドへの脱出ルート(1945年)

101 海軍燃料廠の本部のあるサマリンドに到着して転属を報告、廠長よりねぎらいの言葉をいただいた途端、異常な発熱で即座に入院、熱帯マラリヤと診断されました。また、心配していたタラカン島は

すでに完全に占領された由を聞き、胸が引き裂かれる思いでした。サマリンド地区もすでに臨戦態勢下で陸海混成の指揮部となり、私は中隊長要員だった由ですが、膝負傷のため工作隊長を命ぜられました。

商社などの老人を含め皇民義勇軍を編成し、火炎放射器と手榴弾の製作を行いました。訓練はもっぱら精神的なものに終始し、万一の時の責任者を順次決めておきました。7月中旬、バリクパパンに上陸した豪州軍は次第に攻撃を強めて、負傷者も次第に多くなってきましたが、その後攻撃も弱まり、我々の出撃も遅れると思っていた約一週間後、停戦の報に接しました。数日後、某少佐、某大尉自決の報が入りました。停戦ではなく敗戦と知ったのは数日後でした。

その後、海兵出身者に代わり技術科士官が司令部に入り、豪州軍との武器の引渡し交渉が始まりました。私の接した豪州軍の将校は立派だと思いましたが、兵隊は満足に字を読めない人や、刺青の人も多く、時計など強奪された邦人も多かったようです。

その後全滅したと思っていたタラカンの生き残り邦人が我々に合流してきました。その中に札幌の移転した自宅の向かいの人がおり、先発で復員したので、札幌の母に私の無事についてことづてを頼みました。いろいろなことがありましたが、南ボルネオから最終復員船のリバティ船で1946年(昭和21年)5月25日(くしくも私の誕生日)出航して名古屋に上陸、300円をもらい、6月10日、札幌に無事帰還することができました。

4 北海道開発局時代

帰還して初めて、無事復員したことを報告に大学を訪問したところ、先生たちは「佐々木君に足はあるか?」とびっくりされ、てっきり戦死したと思っていたとのこと。また、母は私の生死のほどを八卦に見てもらい、戦死の卦が出たときも絶対に信じなかったそうです。

自宅で静養中、熱帯マラリヤが再発して著しく体力を消耗しました。昭和21年8月、教室に勤務していた百武君が来訪し、就職の件で原田先生が呼んでいるとのことで、さっそく先生を訪問すると、北星女学校の英語の先生はどうかとのこと。英語は嫌いでしたが否ともいえず、よろしくと申し上げて帰宅しました。それからまた一週間後、また原田先生が呼んでいるとのことで何うと、道庁の土木部より

経験のある地質屋の推薦がきているので北星の先生はやめてこちらに推薦しようと思うがどうか、とのこと。即座にぜひお願いしますと申し上げました。

辞令は後日ということで9月に土木部土地改良課に席を置き、ダム地点のボーリングコアの鑑定や周辺の地質調査などに従事しましたが、辞令は11月30日付けで、この間もっぱら売り食いでした。1947年(昭和22年)6月、新設された土木試験所の地下探査室(開発土木研究所地質研究室を経て、現在の寒地土木研究所寒地基礎技術研究グループ防災地質チーム)室長を命ぜられました。私は土木に関する知識はまったくなく、土試の課長に随行してダム計画地点で土木用語についていろいろご指導をいただいたりしました。一生この道に携わるとしたら土木工学を学ばねばと思い、土木地質について大学に相談しますと、先生の名前で大学の図書館より10冊ほど借りて下さいました。先生に感謝しながら自分で懸命に勉強したように思います。ちょうどこの頃、元道庁の勅任土木部長宮崎正夫の次女・弥生と結婚することになり、媒酌人は原田先生ご夫妻にお願いしました。

我々の勉強した地質は抽象的な説明、解釈が多く、土木屋さんに納得してもらうためにはどうしても定量的な説明が必要であることを痛感しました。そのため、当時の開発局の建設部長に懇願してETLの24成分の地震探査機、10型走時測定装置などを購入してもらい、点の調査より線の調査へと一歩前進することができたと思います。

試験所設立時の方針であった「現実に即応した生きた研究」に対応して主として「堰堤地点における基礎地盤の地質工学的研究」「堰堤基礎地盤の浸透試験法に関する研究」や、さらに「基礎地盤の地質工学的研究」「表層地質に関する研究」などをテーマとして、ダム、トンネル、地滑りなどの調査担当資料より、それぞれの研究解析に従事しました。しかし当時は調査が主で研究が従であったことは否めない事実でした。

当時、水源涵養工事のダムの依頼調査が多く、農林省資源課にはいろいろご指導いただきました。その関係で、1955年(昭和30年)、愛知用水公団の

地質責任者としてぜひ赴任してほしいとの強い要望があり、私も大いに関心がありましたので了解をいただきました。公団ではダムと水路の調査を担当しました。愛知用水公団で、アメリカの Geologist をはじめ多くの知己と技術の取り組み方など学び、たいへん参考になった 2 年 5 ヶ月の公団勤務だったと思っております。



写真-3 愛知用水公団勤務時の地質調査(1960年)

1958 年(昭和 33 年)に公団を退職して再び北海道開発局土木試験所地質研究室長の辞令をいただき、古巣に戻った安堵感でホッとした気持ちでした。当時は北海道総合開発第二次 5 カ年計画が策定され、特に産業の開発振興については、資源を活用する工業開発が大きく取り上げられるようになりました。これに関連して土木試験所でも調査研究の拡充と、計画の基礎資料の整備について特に重点を置くことになり、地質研究室でもダム、トンネル、地滑りなどの調査試験を行い、工事施工にあたってのアドバイスを行いました。

また、堂垣内建設部長へ本道の土木工事に関連する地質的諸問題、地質調査に関する諸問題(ボーリング・物理探査技術)、土木試験所地質研究室に関する問題などの陳情を行いました。

また当時開発局にはボーリングの歩掛かり、仕様書がなかったので、民間発注のために直営の資料を

参考にして、開発局で初めての歩掛かり、仕様書を作成したのは 1960 年(昭和 35 年)頃だったと思います。

さらに、公団に在任中は中断していた土木地質研究会を再開いたしました。翌年「鉱物質土木材料並びに基礎地盤の地質工学的性質に関する研究」を主論文として北大に提出していた論文が教授会で承認され、6 月、理学博士号が授与されました。そして、多忙のため受験できなかった技術士の国家試験に土試で初めて合格しました。1961 年(昭和 36 年)11 月の第 4 回試験合格者ということでした。

1963 年(昭和 38 年)1 月、第 2 研究部長に昇任しました。間もなく、北海道開発コンサルタント株式会社(略して道コン、現在の株式会社ドーコン)の津田専務が来訪され、私の入社を要請されたとの話を所長よりお聞きしました。他からも要請がありましたが一番先に要望のあった道コンには知己もあり、いずれ転職するなら札幌でと決めておりましたので、お世話になろうと思いました。至急入社を要望されましたが、後任人事のため所長が猶予を要請され、私の転職問題は 1 年先延ばしとなりました。

5 コンサルタント時代

北海道開発コンサルタント株式会社は 1960 年(昭和 35 年)6 月に設立されておりました。1964 年(昭和 39 年)4 月、土木研究所を退職、同日道コンの技術顧問、5 月に取締役に就任しました。なお、土試地質研究室より、私のほかに二人が道コンに移籍しました。当時道コンにも大卒の地質屋がおり、これらの人と土試からの人たちとで技術 6 課を設立、コンサルタントの社員の働きぶりはたいへんなもので仕事が山積していたとはいえ、ほんとうに感心させられました。

私が入社した年、建設コンサルタント業法が制定され、建設コンサルタント登録が開始されましたので、技術士資格者の常務と二人で登録をし、建設コンサルタント協会に加盟をしました。私は今後のコンサルタントの発展は技術力が絶対であり、そのためには技術士の数が会社の技術力の評価になることが必至であると思い、技術士受験を積極的に奨励し

ました。まず技術職員の1割を、次いで全社員の1割を、さらに三桁の技術士をという目標を立てました。現在、ドーコン社内には300名以上の技術士がおり、密かに喜んでいる次第です。

1975年(昭和50年)5月、社長に選任されました。責任の重大さに身の引き締まったのを今も覚えています。当時の当社の機構は、管理部門(総務部、経理部、審査部)・基礎技術部門(技術開発部、電子計算部、土質試験室、理化学分析室)・技術部門(調査部門、土木部門、都市部門、農業部門)など16部2室2試験室に大別されておりました。社長になって一番先に、いつ、誰に社長のバトンを渡すかを常に考えること、常に他より技術が上位にあること、for the consultantに徹すること、各部がセクトにならず総合コンサルの有利性を生かすこと、常にクライアントの意思を充分把握していること、経営陣を信頼することなどを社員に話したように思います。

機構としては、下水道部門、環境保全室、営業部の新設、月寒本社ビルの隣に実験棟の新設、東京・仙台出張所の開設、最新電算機の購入などを行うとともに、新分野の開拓、人材育成、機構の効率的活用などを積極的に行うよう社員の指導を幹部社員に要請しました。また海外について広い知識が必要と思い海外事業部を新設しました。さらに北海道海外協会が実施している海外技術研修員受入れ事業の一環として、1977年(昭和52年)から当社への研修生の受入れを開始し、すでにブラジル、パラグアイ、中国、ネパール、ケニアなどの各国より、いずれも長期間にわたり開発途上国の基盤技術向上に貢献で

きるように協力してきました。

一方、社内においては調査、設計などに関連して各種の表彰も数多く受けました。またいろいろ失敗もありました。私は、表彰は担当者が、失敗は社長が責任を負うべきだとの基本的な考えですが、実際はその逆で、表彰の時は社長が出席して表彰を受け、失敗のときはなるべくトップには報告せず、大きな問題は別として、担当者間で始末してしまう傾向がありました。表彰は会社が受けるのでやむを得ない面もあります。また失敗はなるべく上司には知られたくない意向が強いようでしたが、会社の信用問題があるだけに社長が知らないではすまないから留意するように指示したことを覚えています。

どこでもそうですが、会社の成長につれ、いろいろ問題が起こってきます。私が社長の時、地質部でよく問題を起こしたのはボーリングで、水道管や電話線を切断、その度に被害者や関係者にお詫びに伺ったことや、網走のダム現場で、ボーリングの運搬車が2～3年生の木を踏みつぶして通過していった件で、城戸さんと一緒にお詫びにいった時の被害者の恐ろしいほどの剣幕にはまったく弱りました。もちろんこちらが悪いのですが、私はこの歳になるまであれほど怒られたことはありませんでした。もちろん十分な補償金を支払いました。

時代の趨勢に伴い人員も増加、そのため社屋も狭隘となり、都心部に4つの分室を設けました。社長として6期12年務め、取締役会長、取締役相談役、相談役を経て、1999年(平成11年)5月退職いたしました。退職した年の会社の規模は社員数813名となっており、現在新札幌に新社屋が完成しています。

ともあれ家のことは一切家内任せでした。35年間の会社勤めを終え、家内にご苦労様でしたといわれた時は何かしらホッとしたのを覚えております。

6 日本技術士会と日本応用地質学会について

1966年(昭和41年)1月、小樽の石山技術士(船舶部門)が来社され、本道の技術士の結集についていろいろ協議、私が事務局を担当することとなり、本部の日本技術士会とも再三連絡を取り、まず試験



写真-4 社長室にて

合格者で北海道技術士センターを設立、次いで本部の総会の承認を得て全国 5 番目の支部として設立され、支部はセンターを全面的にバックアップすることを基本としました。

私は事務局長、副会長、次いで本部理事、センター会長、さらに支部長を 20 年務めさせていただきました。この間、当初より重要課題であった札幌受験地実現のため、科技厅、大蔵省などに陳情を繰り返し、1967 年(昭和 42 年)、札幌受験地が決定を見ることができました。

第 4 回技術士全国大会(1977 年)は札幌が引き受け、全国で初めて夫人同伴の歓迎を表明し、さらに全国で初めて主催地の道より補助金の交付を受けることができました。



写真-5 技術士全国大会にて挨拶(1987年)

1978 年(昭和 53 年)、創立 15 周年行事として旧満州へ技術交流のために訪中使節団を派遣、都合 3 回の技術士全国大会、日韓技術士会議、地方公共団体職員と技術士の合同セミナーの開催などを実施しました。現在本道の技術士の有資格者数は約 2,000 名となって各方面で活躍しておられることはたいへん喜ばしく思っております。

巷間技術士会員になってもメリットがないという言葉が往々にして耳にしますが、私は、メリットは与えてくれるものではなく、自らが作り出すものであらうと思います。

また 1953 年(昭和 28 年)頃、地質研究室を中心に物探の関係者の皆さんとも協議して土木地質研究会を発足、北大の先生方も参加された講演会と、若い人も気軽に発表できる月一回の研究発表会を開催いたしました。一方、東京では 1955 年(昭和 30 年)

より災害地質研究会―応用地質研究連絡会―応用地質研究会と変遷し、1963 年(昭和 38 年)に日本応用地質学会(現在の一般社団法人日本応用地質学会)が設立されました。1964 年(昭和 39 年)本部委員に選任された私は、支部の設立を進め、1966 年(昭和 41 年)、全国で最初の支部として承認されました。

私は初代支部長を 20 年務めさせていただき、先年、名誉会員に推薦され、たいへん光栄に思いました。この道に携わって 50 有余年、応用地質分野の素晴らしい発展は誠に喜ばしい限りと思います。経験を量的に表現できるようになったことは重要なことではありますが、やはり経験は重要なウェイトを占めていると思います。ただ過信と過小評価は禁物と思います。応用地質の分野は、専門分野(特に地質図の作成)はもちろんのこと、広範囲な関連分野の知識が不可欠であると思います。学会の現状を見聞し、活躍している多くの方々を見るにつけ、往時を回顧して誠に感慨深いものがあります。今後のさらなる発展を心から念願しています。

7 ゴルフについて

会社に入って間もなく、津田専務よりぜひゴルフをと毎日のように勧誘を受けました。コンサルタンツ会社のような企業は、いろいろな意味でストレスがたまるので、その解消のためにはゴルフが最適だから、というのがお誘いの理由。とにかく止まっている球を打つのが、なぜおもしろいのか、どこがストレスの解消になるのかと疑心暗鬼でしたが、せっかくのお誘いなので会社の帰りに練習場に通い、少しずつ興味を覚えるようになりました。

練習場にきて様子を見ていた津田専務から、そろそろコースに出てみようといわれ、アップダウンの多い駒丘コースでいろいろ教わりながらプレイしました。その年の 9 月頃、津田専務よりクラブコンペに誘われました。プレイ後、「佐々木さん、プレイオフですからすぐにアウトのほうにきてください」とのこと。初めてのクラブコンペに出ただけでも緊張の連続だったのにプレイオフとはほんとうに驚きでした。キャディさんが赤い手拭いを頭につけ、前

でプレイしている人たちに譲ってもらいながらの初めてのプレイオフ、残念ながら1打負けとなりましたが、それからはゴルフがおもしろくなり、ずいぶん通いました。

思い出深いのはちょうど夏至前後にクラブ了解のもと、駒丘コースをスリーハーフまわったことです。おそらくこの記録は未だ破られていないと思いますが、さすがにたいへん疲れたことを覚えています。また思い出といえば、会社の役員と一緒にプレイし、37と41の78でまわり1位となったことです。これが私の今までの最高スコアです。

海外では、エジプトのピラミッドの10メートルほど手前でプレイした思い出や、ポルトガルのリスボンではすり鉢状の斜面の途中にピンが切っているなど、いろいろおもしろいことがありました。また、全日空オープンのプロアマ戦に10回ほど出場させてもらいましたが、最初は全盛時のジャンボ尾崎プロと一緒に、たいへん緊張した記憶があります(写真-6)。

しかし89歳のとき、脚・膝が弱って皆さんに迷惑をかけることになると思い、残念ながら自らのゴルフは一切中止とし、今はもっぱらTVのゴルフファンになっております。



写真-6 ジャンボ尾崎プロと(1990年)

8 結び

私の20代は戦争時代、30代は敗戦時代、そして40代は復興から安定時代を経て現在に至っているわけで、私たちはこの時代に翻弄されて生きてきたように思います。そして多くの友人を失うと同時に、得がたい経験を経て、多くの人々の援助をいただき、叙勲を始め各種の賞をいただくなど、いろいろな意味で関係者の皆さまに心から感謝申し上げます。



写真-7 南米ペルー・クスコにてアルパカと(1979年)

佐々木 敏 雄 (ささき としお)
技術士(応用理学部門)

